

先週私たちは、人が救われるのは、「主イエスの恵みによる」ということを見ました。ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、私たちはみな、主イエスの恵みにより、それを感謝して受け取る信仰によって救われます。ただそれは、ユダヤ人信仰者たちにとっては、受け入れ難いことであつたので、異邦人の救いの条件として、主を信じることの他に、割礼を受け、戒めを守ることを、彼らは加えようとしたのです。

そのことが発端で、パウロとバルナバはエルサレムに下り、そこで使徒たちや長老たちと会議をもったわけですが、そこで決められたことが、今日の箇所の手紙として書き記されています。指導者たちは、これを異邦人教会の中心であつたアンテオケ教会に届けるために、彼らの中からバルサバと呼ばれるユダとシラスを選び、パウロとバルナバとともに彼らをアンテオケに送り出すのです。

ということで、今日は、その手紙の内容の確認から始めていきます。まず最初に、使徒たちと長老たちが、最初の挨拶の部分で、「兄弟」という言葉を繰り返していることに目を留めたいと思います。23節「彼らはこの人たちに託して、こう書き送った。『兄弟である使徒および長老たちは、アンテオケ、シリヤ、キリキヤにいる異邦人の兄弟たちに、あいさつをいたします』」。

エルサレムの指導者たちは、「兄弟である使徒および長老たちは、…異邦人の兄弟たちに、あいさつをいたします」と書き送ったわけですが、これは彼らをして、異邦人たちの救い、つまり、それが主イエスの恵みにより、信仰によって、ということに公に認めたことを意味します。それゆえに、「私たちは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたは、私たちの兄弟だ」と言うのです。

このことは、今の私たちにとってはごく当たり前のことのように思えるかも知れません。でも、これまで見て来たように、ユダヤ人たちにとって、異邦人を「兄弟」と呼ぶことなどあり得ないことでした。けれども、主が、その両者の間の敵意の壁を打ち壊されたのです。何によってですか？ご自身の血によって、つまり、神様の前にどちらも罪人であるユダヤ人と異邦人のために、主は神のさばきをご自分が代わりに受けることで、十字架のその死をもって両者を神様の前に和解させて下さったのです。主を信じる者は、みな主と一つにされるわけですが、それによって互いに対しても一つ、同じ神の家族に属する者とされるからです。

24-25節「私たちの中のある者たちが、私たちからは何も指示を受けていないのに、いろいろなことを言ってあなたがたを動揺させ、あなたがたの心を乱したことを聞きました。25 そこで、私たちは人々を選び、私たちの愛するバルナバおよびパウロといっしょに、あなたがたのところへ送ることに衆議一決しました」。

エルサレム会議がもたれた理由、それはユダヤからアンテオケに来たある人々が、「異邦人が救われるためには、割礼を受けなければならない」と教えたからですが、ユダヤの指導者たちは、それが自分たちから出たことではなく、彼らの独断であつたことを明確にしています。そして、この手紙を通して、会議で決められたことを正確に伝えるために、自分たちの中から人々を選び、彼らをバルナバとパウロといっしょに送るように決定したと、その流れを説明するのです。

26節「このバルナバとパウロは、私たちの主イエス・キリストの御名のために、いのちを投げ出した人たちです」。バルナバとパウロが、主イエスのために、いのちを投げ出した人たちであることは、異邦人兄弟たちの間では、すでに知られていたことと思います。彼らこそ、バルナバとパウロの教えを受け、また彼らをその宣教へと送った人たちだからです。でも、このようにエルサレムの指導者たちが書き送ることで、パウロとバルナバが、自分勝手に異邦人宣教を進めているのではなく、それが神様によること、またエルサレム教会も彼らの働きをサポートしていることを伝える意図があつたと思われれます。

27-29節「こういうわけで、私たちはユダとシラスを送りました。彼らは口頭で同じ趣旨のことを伝えるはずです。28 聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷も負わせないことを決めました。29 すなわち、偶像に供えた物と、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けることです。これらのことを注意深く避けていれば、それで結構です。以上。』」。

ここに「聖霊と私たち」とありますが、なぜ彼らは「私たち」だけでなく、「聖霊と私たち」と言ったのでしょうか？この手紙を書くにあたり、何か特別な聖霊の語りかけがあったのでしょうか？これは推測ですが、前回の箇所、ペテロは、異邦人たちの救いについて、神様は彼らに聖霊を与えることで、そのあかしされたといいました。つまり、自分たちの始まりは、ペンテコステの聖霊降臨であったが、異邦人たちの救いも、聖霊が与えられるところからであったとペテロは伝えたのです。それゆえに、聖霊の導きは明らかで、この会議の決定事項は、ただ自分たちの判断によるのではなく、実に聖霊によったと彼らは結論付けました。

では、どうですか？ここには「重荷」、「負わせない」「避ける」「注意深く」という、どちらかという義務や強制的なものを連想させる言葉が使われていますが、ここに記されていることを、あなたはどう受け止めておられますか？指導者たちの伝えていること、それは明らかに「偶像に供えた物、血と、絞め殺した物と、不品行を避けること」ですが、それがこの手紙を通して彼らが最も伝えたかったことでしょうか？

先週の内容とかぶりますが、このことを救いの条件のように理解している方はいませんか？すでにお伝えしたように、これらのことは、ユダヤ人たちが律法を通して昔から罪として理解していたことです。それゆえに、これらを避けることは、ユダヤ人たちへの愛の配慮、つまり、彼らにつまずきを与えないためであって、決して救われるための条件ではありません。でも、それがこの世の偶像や性的不品行と深く関係しているゆえに、これらを避けることは、主を信じる者にとって間違いなく益と言えるのです。

ですから、指導者たちが伝えたいこと、それは「このこと以外は何も重荷を負わせない」ということです。つまり、異邦人が救われるには、ユダヤ人のようにする必要はなく、ただ主イエスの恵みによって、それを信じる信仰によって救われるということです。そのように理解すると、この後、手紙を読んだアンテオケの人々の応答が記されていますが、それも容易に理解できます。30-31節「さて、一行は送り出されて、アンテオケに下り、教会の人々を集めて、手紙を手渡した。31 それを読んだ人々は、その励ましによって喜んだ」。

この手紙を読んだ人々は、「これらのことを避けるべき」ということに励ましを受けたわけではありません。その救いが、ただ主イエスの恵みによって与えられることに励ましを受けたのです。それゆえに、彼らは喜んだ。自分たちが、今まさにその主からの恵みに預かっていることを喜んだのです。では、どうですか？この手紙は、あなたにとっても励ましですか？そこに励ましを見い出すゆえに、あなたはその救いを与えて下さった主イエスを心から喜んでいませんか？

32-33節「ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、また力づけた。33 彼らは、しばらく滞在して後、兄弟たちの平安のあいさつに送られて、彼らを送り出した人々のところへ帰って行った」。ユダもシラスは、預言者だったので、ただ手紙を渡し、口頭でその説明をただけでなく、多くのことばをもってアンテオケの兄弟たちを励まし、力づけました。この「多くのことば」が、みことばから、つまり、旧約聖書からのことばでなくて何でしょう？彼らは、みことばから主イエスについて語ることで、兄弟たちを励まし、力づけたのです。そして、しばらくの後、ユダヤへと帰って行きます。

35節「パウロとバルナバはアンテオケにとどまって、ほかの多くの人々とともに、主のみことばを教え、宣べ伝えた」。すでにアンテオケを拠点としていたパウロとバルナバは、ユダとシラスがユダヤへ帰った後も、そこにとどまります。彼らはそこで何をしていましたか？「ほかの多くの人々とともに、主のみことばを教え、宣べ伝えた」。この「ほかの多くの人々」とは、以前、アンテオケ教会の指導者たちのことを見た際に、すでに見ましたが、彼ら以外にも、みことばを教え、宣べ伝える人々がその後起こされたのでしょうか。

このところからもわかるように、初代教会は、主のみことばが教えられること、宣べ伝えられることを常としていました。それによって心に励ましを受け、信仰が強められるためです。みことばは、信仰をもってそれを聴く者に、主イエスとその恵みによる救いのすばらしさをわからせてくれます。それがわかるなら、そこには励ましが与えられるのです。そして、励まされるなら、そこには喜びが生まれます。この主にある喜びこそ、私たちをして、他者に主の福音を語らずにはおられなくさせるものではないのでしょうか？

もちろん、みことばは、知的に知るだけでは十分ではありません。聖霊によって私たちの心（霊）の目が開かれることなしには、誰も主イエスを、そして、その恵みを本当の意味で知ることはできないのです。そうであるなら、そこに励ましを見ることもできません。ですから、みことばに聴くことと同時に、祈りが大切なのです。聖霊の助けを信じて祈る時、聖霊がみことばを通して主イエスを証して下さるからです。

では、皆さんにお聞きしますが、今日あなたは主のみことばに教えられていますか？それによって励まされ、力づけられていますか？あなたの祈りは、聖霊の助けをいただいて、主とその恵みをさらに深く知ることで、主への愛を深めたいというものでしょうか？聖書には、間違いなく「何々しなさい」とか「何々してはいけない」といった表現が出てきますが、それらを主との愛の関係なし、ただ戒めを守るようにして実行するなら、そこには喜びはなく、その行いも心の伴わない機械的なものとなってしまいます。

でも神様は、何よりも私たちとの愛の関係、信頼関係を求めておられるのです。それゆえに、主は、みことばと祈りをもってご自分に近づく者に励ましを与え、その心に喜びを与えることで、そこから他者への奉仕へと向かわせて下さいます。そのようにして主との関係が、愛と信頼によって建て上げられていくなら、私たちはいよいよ自分がすべてのことから自由にされていることを悟るのです。でも、その自由が、自分の欲を満たすためではなく、愛をもって他者に仕えるために与えられていることもわかるようになります。

私たちクリスチャンは、なぜ自分のためでなく、他者に仕えることができるのでしょうか？それは主が、ご自分の愛される者たち、つまり、ご自分と一つである私たちのことを心配（ケア）して下さるからです。私たちとしては、自分のことを後回しにし、他者を優先することで、自分はどうなってしまうのかと不安になることがあるかもしれません。でも、主が責任をもって最後までケアして下さるのです。なぜそう言えるのか？そのことを証明するのが、主イエスの十字架です。

主イエスは、罪人である私たちをその罪と滅びから救うために、ご自身のいのちを罪の代価として支払って下さいました。十字架にかかり、その身代わりの死を遂げることで、私たちを贖い出して下さったのです。そして、主は、三日目によみがえられ、ご自分を信じるすべての者に、永遠のいのちを約束しておられますが、そのようにして、私たちを救って下さった方は、私たちが最後まで主を信頼して歩めるよう、ご自分の霊とみことばをもって私たちの心を励まし、その信仰を強めて下さいます。その主からの励ましのゆえに、私たちはいつでも主にあって喜び、救いの良い知らせを人々に宣べ伝えるのです。主に近づこうではありませんか。